

草庵仏教

第220号
(発行日)

2008年10月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と

12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

二人の仏者

念佛寺の秋季彼岸会にご縁があつて、インド僧（シッキム人）でチベット仏教から真宗に転向されたソナム・ワンデイ・プティア師の法話をお聞きすることができた。

師は若干三十五歳であるが、インド北部国境、紅茶の産地で有名なダージリンに近い村で、チベット仏教におけるニンマ派の僧侶（ニンマ派でも妻帯が認められているセクトに属する）の家庭に生まれた。三歳頃より父の僧から仏教僧になるべく厳しい修行を科せられた。毎朝三時から六時、夜は六時から九時までの勤行（読経）また就寝前には父から仏教の教えの手ほどきを毎日受けた。長ずるにおよび、それまでは自発的な求道というよりは親のしつけによって修行をさせられていたのが、十七歳の頃からもっと厳しい修行をして菩薩になりたいと自らが発願するようになった。

十八歳の時、シッキム王家が所有している仏教瞑想センターに入る。小さな暗い独房に三年三月三週間三日という長期間、一歩も外に出ずに瞑想と読経の修行に専念するという、チベット仏教では最も厳しい修行、いわば比叡山の千日回峰行にも比すべき行を修めた。

そして、二十三歳の時、請われて故郷の高校の校長になった。その間も、修行は続けていった。そしてしばしば、釈尊お悟りの地であるブツダガヤに行き、菩提樹の元で瞑想修行を重ねた。

しかし、瞑想修行を続ける中でソナム師は、瞑想に集中している期間あるいは瞑想修行を終わってしばらくは、精神的に浄化された境地にいることができるのだが、世間に帰っての生活をしばらくすると、以前と同じく煩惱がむくむくと湧いてきて、もとももどってしまふという、そういう壁にいつもぶつかったので

あつた。これではダメだとさらに瞑想修行を続けるのであるが、抑えようとしても抑えることのできない煩惱になやまされ続けていたのである。

二十五歳のころ、ブツダガヤに滞在し瞑想修行に集中していた時に泊まっていた宿に、たまたま同宿していた向坊弘道氏に出会い、氏のお話を聞く縁が出来た。氏と親しくなるうちに自分の悩みも話すようになった。「瞑想修行を重ねるが、なかなか煩惱が離れられない」と話すと、氏が「日本にも七百年前同じような問題にぶつかって悩み、お念仏にであつて道が開けた親鸞聖人という方がいる」と、聖人のことを話された。初めの頃は、氏の話はあまりにも今まで修めてきた仏教とは違っていたので、氏は自分を仏道修行から引きおろそうとする悪魔ではなからうか、など

と思ったりもした。しかし、氏から「煩惱が離れられないまま、そのまま死んだらどうする」と問いかけられ、瞑想中もその言葉が耳に離れず、気になって落ちついて修行が出来ないようになった。

氏の言葉は悪魔かも知れないが、しかし、言われることには引きつけられる。そういう日々が続いた。こうして向坊氏が何度も渡印してブツダガヤに参拝するたびにお会いして氏から真宗の話を聞くようになった。また氏が日本にいるときはしばしばメールで質問し、その都度返事をいただいた。返事は短かったが肝要な点がしめされていた。そうこうして、だんだん氏の語る真宗のお話に深く触れるようになった。初めは真宗の話を聞いてもよく分からなかったが、三年ほどたつてようやく真宗の心が分かつてきだし

《 休会のお知らせ 》

十一月十二日の夜の（共学会）は休みます。

た。そして、とうとうチベット仏教から真宗に転向し、三十歳の時、向坊氏の援助を受けて来日し、浄土真宗本願寺派の中央仏教学院に入学して真宗を学び、真宗僧侶としての得度を受けた。

ソナム師は以上のような真宗との出会いを語った後、さらに次のようなお話をされた。

真宗は名号を聞くだけで救われる。それが有難い。その名号は法蔵菩薩様の五劫という長い間の思惟によって出来た名であるから、この名を聞くばかりでどのような人も助かる。南無阿弥陀仏には一切の人を助けるすばらしいパワーがある。この御名を皆さん頂いてください。私は世界中に名号の有り難さを伝えたいと、熱っぽく語られた。

そして、自分の煩惱の心のありのままの姿を他の人たちに開き示してください。親鸞聖人の有難さを強調された。

このソナム師のお話をお聞きし、師がまさに法然聖人や親鸞聖人と同じように、厳しい自力の修行を経験し、自力の修行のいきづまりにおい

て、真宗念仏の有り難さに気がつかれたこと。いわば浄土の祖師方がたどった道と同じように追体験して、浄土の教えに帰依されるようになったことに感銘を受けた。

ことに、「自分の煩惱の心を他者に開かれた親鸞聖人」を強調されたのは、印象的であった。

聖道門の修行では煩惱が盛んに起こることは否定すべきことであり、あつてはならないことであり、できるだけ煩惱を除いていこうとする。それゆえ修行僧としては、ことに修行の進んだ人と敬われるような立場にいる僧にとつては、自分の内面に煩惱が湧いてくることはあつてはならないことだし、ましてそのことを他の人に知られたくないし、知られることを恐れるような思いが起こるのではなからうか。そして逆に他者には一般の凡夫とは違う浄らかな人であるように見せかけようとする思いが湧くことがあるのではないか。だから、自分に誠実であればあるほど、内心と外の自分の姿との矛盾に悩まされざるを得なくなるのではなからうか。

ソナム師もかつて一二〇〇日以上も真つ暗な小屋に籠もつての厳しい修行を終えて、デュプラという称号をもらっている。これはチベット仏教では高僧の称号であるとのことである。しかし、「高僧」と他者から扱われることと自分の心の中に起こる浅ましい煩惱との葛藤かつと。そういうジレンマの中で親鸞聖人に出会い、聖人がご自分のありのままを慚愧しつつ、煩惱の自身を公開されているお姿にうたれた。自分の本当に落ち着ける姿を聖人の上にソナム師は感じられたのではなからうか。

こうしたソナム師の、今日の真宗の先生方からは聞くことのできないような貴重な経験をお聞きすることが出来たとともに、ソナム氏を導かれた故向坊弘道氏の偉さを改めて感じたことであつた。

向坊弘道氏は一九三八年、北九州市に生まれた。一九五九年、東京大学の学生（二十一歳）だった時、交通事故で全身マヒという重い障害を負うようになった。

事故から六年後、それまでずっと絶望的な日々を送りな

がら自宅に閉じこもつて伏していた中、たまたまお手次ぎの寺の住職（本願寺派）の勧める小さな本（上田義文博士の著）を読んだのがきっかけで真宗を聞き始める。

真宗のお話を聞くにもお寺の本堂に上がることが出来ないで、本堂の下で真宗の説教に熱心に耳を傾けた。やがて阿弥陀仏の大悲が届き氏の心が開けた。

人生に光明を見出した氏は、重度の障害者であつたが、貸しビルや駐車場を運営して経済的な自立を始めた。そして、自らの念願である真宗を国内外に広めることにとつとめるとともに、障害者の自立を助ける運動や福祉活動に力を注がれた。

フィリピン・ネパール・韓国・ベトナムに車イスを無料配布したり、ネパールの三つの村で小学校を運営したり、障害者がフィリピンで生活できる施設をつくらしたり、さまざまな社会活動をされた。

また、ネパールに世界中の人が泊まりながら仏教を学べるセンターとしてのカトマンズ本願寺を建てられ

た。現在ソナム師が所長を務めている。

このように重い障害を抱えながら、出会った真宗の教えを伝えるとともに、福祉活動を活発に行うなど、健常者も容易に追従できぬ、すばらしい生き方をされたのである。そういう氏の生き様があつて、氏の説法には人を感動せしめる威力があつたであろうし、ソナム師にもそういう氏の姿を通して真宗の教えが伝わっていったのだと思われ。氏は二〇〇六年、六十七歳で惜しくも世を去って行かれた。（了）

《報恩講のお知らせ》

難波別院（南御堂）報恩講
10月25日から28日

ご本山（東本願寺）報恩講
11月21日から28日

正信偈に学ぶ問答

(九)

五劫思惟之撰受 重誓名声聞十方

(正信偈書き下し)

五劫に之を思惟し撰受せり。重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと。

(現代語訳)

五劫もの長い間思惟してこの誓願を選び取り、名号をすべての世界に聞こえさせようと重ねて誓われたのである。

*

D 「無量寿経によれば、法蔵菩薩は一切衆生をひとしく救いたいという広大な願いを起こされ、五劫という長い間、思惟をされて四十八願を選び取られた、と説かれています」
G 「五劫という長い間といわれるのですが、五劫とはどれほどの間ですか」
D 「劫とはインドではカルパと発音し、数え切れないほどの長い時間をさします。それで一劫とはどれほどの長い間かについては、二つのたとえ

があります。いわゆる磐石劫と芥子劫のたとえです」

*

G 「磐石劫とは」

D 「それは、タテ・ヨコ・タカサが四十里の大きな石があつて、三年(または百年)に一度天人が舞い降りてきて、衣で一度払っていき、それを何度も繰り返し、ついに大石がすり減ってなくなるまでの間を一劫とする、とたとえられるほどの長い時間のことだと。一回、天人の羽衣でなでてどれだけすり減るのか。一度こすると石として凝縮しているおびただしい分子のごく一部が石から離れるくらいのことでしょう。それを、三年に一度衣で払うことをどれほど繰り返し返せば、石が摩滅することか、ほとんど想像することが出来ません。それほど長い時間を一劫とするのです。それが五つで五劫です」

*

G 「では芥子劫のたとえとは」

D 「タテ・ヨコ・タカサが四

十里ある大倉庫に芥子粒を満たし、その芥子粒を三年(あるいは百年)ごとに一個取り出して、芥子粒が全て倉庫からなくなる歳月を

一劫とたとえられています。

これも想像を絶する長い時間です」

G 「磐石劫も芥子劫も、とにかく考えられないほどの長い時間をあらわそうとするた

えでしょうが、それほど長い間法蔵菩薩は思惟をされたことですが、私にはどうもピンときません」

D 「着たり飲んだり、仕事をしたり、おしゃべりをして過ぎている私たちの日常生活やあるいは十年二十年と世界の状況が移りゆくような時間なら実感はできますが、劫のような時間の観念は、人間の感覚にはほど遠い宇宙的な時間の話ですからね。実際、一劫はこの宇宙が生じて滅する間のことともいわれますから。そういう意味では私たちの時間観念を超越した時間を表されるのでありましょう」

*

G 「それほど長い間法蔵菩薩は私たちのために考えられたのですね」

D 「五劫思惟という経説によつて感じられることは、それほど長い間、私を助けるために考えてくださったのであつた南無阿弥陀仏でありお浄土であること、そこに深いご恩を感じます」

G 「それを聞くと私は、自分の幸せの道は既に阿弥陀様が考え尽くしてくださっていたことを改めて知らされます」

*

D 「それなのに私たちは自分の思案を重ねて自分の助かる道を探そうとしています。阿弥陀仏が既に思案し用意してくださっていることを思うにつけ、自分の思案をいろいろさしはさんで本願の思召しを素直に聞かず、従おうともしないのは、自分の思案がまだ間に合うように思つてからですね」

G 「法蔵菩薩様の思惟だけではまだ足りないかのように自分の思案を加えようとしているのですね」

D 「ええ、そう思います。今回紹介したソナム師が、真宗の話の中で非常に感銘を受けたのは、南無阿弥陀仏は法蔵菩薩様が五劫の間考えて考えて仕上げた名であり、この名を聞くだけでどんな人も助か

る、といういわれであつたとお話をされました。これはどうにもならない私の救いをすでに法蔵菩薩様が考え尽くし、修行成就されていた、その名号が南無阿弥陀仏であつた、という驚きでありました」

G 「そのように、南無阿弥陀仏が(必ず汝を浄土に生まれさせる)との仰せと、聞かせていただいても、心の奥でホンマヤるかと思案し疑う気持ちがあります」

D 「それを計らいといひのですね。阿弥陀仏のご思案の結果をマコトであると認めようとしなさい、そういう心を邪見・慢と申すのでありましよう」

G 「邪見・慢の私を知らされませんが、どうしたらこんな心をなくすことができますか」

D 「邪見・慢のゆえに迷ってきたともいえますが、この邪見・慢の心を離れることは非常に難しいですね。むしろ(私は本当に邪見・慢であつた)と心から知らせていただくことの外に邪見・慢を超えて弥陀の本願を受け入れる道はないのではないでしようか」

信心夜話

《松並松五郎念仏語録に聞く》八

太字は松並さんの言葉。

*

○或る師の姉様

「弟は念仏せよ念仏せよと、やかましく言うが、信心もないのに念仏は申せません。説教詣りに行き、信心頂こうと、一生懸命になっているが、一向に信心戴いた様にも思えません」と。

「信心もらうことはやめなされ。信心は私が戴く事と思っていました。信実は阿弥陀様が、お前の今の心今の姿のまま助けると呼んで下さる、そのままだける業が出来上がったのが南無阿弥陀仏である。信心は私がするのかわかと思っていたが、そうでない。仏様があなたを助けるに間違いないと信じてござる、それが南無阿弥陀仏じゃで、信心もらうのはやめなされ」と。

「真実信心には喜びがあると申されますが、私には喜び心がない」と。

「私等は極楽へ行きたくないのや。地獄へいくと、心はいうている。そんな者が喜びますかいな。行きたくない者が喜べるはずがない。千円の金でも、もらった方がよほど有難い。行きたくないまま南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と、念仏させてもらったら、仏様はへあわしの言う事聞いて念仏してくれる」

と、仏様が喜んで下さる。ああそんな南無阿弥陀仏であったかと、南無阿弥陀仏と喜ぶ事になる。それを信心歎喜と言う」。

これ聞いて姉さん

「これまでは聞き様が全く反対であった」

と、しきりに南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と。

（「信心もらおう」「信心取ろう」と信心をいただきにかかり、信心取りにかかり、信心をつかもうとする。それが自力の計らいであり、自我の計らいである。自我の心は信心の問題に限らず、どんな時でもなんらかの功德を得ようとし、つかもうとする。しかし、自分には信心はもう必要ないと思つて真宗の聴聞を離れてしまうのでもない。どちらでも自分の方を向いている。そうではなくて、阿弥陀仏のお心に向く。至信心^{しんぎん} 樂は阿弥陀仏のお心である。至心は間違いない、信樂^{しんぎやう}は疑いなくの阿弥陀仏のお心。「信も行もなにもない汝を間違いない疑いなく助ける」のお心が至信心樂。この親心の表れが南無阿弥陀仏。この南無阿弥陀仏を聞くだけ、仰いでいるだけ。私の心に信心を取り込もう、ただこう、つかもうと、自分の心の世話にかかるのではない。阿弥陀仏の大悲の方を仰ぐばかり。南無阿弥陀仏で私が助かると、信じ切つて下さっているのも阿弥陀様。南

無阿弥陀仏をいただいて称えるのを喜んで下さるのも阿弥陀様。私の信心歎喜は阿弥陀様のその信心歎喜からあらわれて下さるのでしたか）

○へたとえ一声も、南無阿弥陀仏と称ふる者、必ず間違わさぬ」と仰せられたでは有りませぬか。頼みもせぬに、私を助ける南無阿弥陀仏に、成り切つて下さったのでは有りませぬか。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

（一声なりとも称える者を助けるとの誓いが成就した南無阿弥陀仏様なれば、私をまるまる助ける仏様になりきつて下さった阿弥陀様。私の知らぬまにすでに、私の一大事を心配し、願も行も代わつて仕上げてください、「汝を引き受ける、助ける」と喚びずめに喚んでくださっていたのでしたか）

○「本当に薬をのんでいる人」
「のまずに効能書を読んでいる人」
南無阿弥陀仏

（多くの効能書を読むだけで、薬を飲まないから薬効が一向にあらわれな。仏書を読み、単に聴聞するだけでは、薬をのんだことにはならない。薬をのむとは、万病を治す醍醐^{だいご}の薬である南無阿弥陀仏を称え聞くことであり、本当にのむとは南無阿弥陀仏を聞

き受けたこと）

○或る師、

「腹の底に、ありがたいと思うを念仏、口に出て称名」

と言われるが、わたしやあなたに、かたいもの、これだと言うものが出来たら「仏と」「生き別れや」。

（腹の底になにもないから、「そんなものを」と現れてくださるお念仏。腹の底にかたいものや、これでこそというようなものがなにもないことがお助けが間違いないこととしるし）

○聴聞育ちのお方は、有難いお話を頭に保ち腹に持つて、念仏となつて流れ出ない。胃袋の中で腐^{くさ}っている。

それだとして聞かねば分らない。聞くと言うは「仏願の初めとその結果」を聞く事。その結果が何と成りたもうたかを聞くのや。南無阿弥陀仏と声の仏に成りたもうた。宗祖様は学問して、しぬいて、その上念仏の体験を積みたお方故、宗祖様のお言葉は今にいきいきと働いている。その宗祖の仰せをそのまま如来様の仰せとおおぐ。

（聞法とはほかのことを聞くのではない。仏願の起りとその結果を何度も何度も聞く。法蔵菩薩様の起こされた広大な大悲の本願の結果が声にまで成られた南無阿弥陀仏。この音声仏に助

けられての往生と聞かせていただく
(了)